九州産業大学国際文化学部紀要　第14号　1－16（1999）

E.ディーデリヒスと生活改革運動に関する一考察

――教育・文化活動を中心にして――

小　川　哲　哉

（1999年6月1日受理）

1．はじめに

すでに指摘されているように[1]，「生活改革運動（Lebensreformbewegung）」は，19世紀から20世紀の転換期のドイツにおいて生起した一種の生活刷新運動であり，それは当時のドイツにおいて急速に進行しつつあった工業化と都市化に伴う社会的・経済的変容に対抗し，素朴な自然主義への回帰を目指して行われた運動であった。より具体的には，禁酒や禁煙運動，広範囲に広がる道徳的堕落の克服を目指し自然主義的な教育を模索していた教育改革運動，ヴァンダーフォーゲル運動や青年運動の中で発展した民衆歌謡運動，ダンス文化やリズム体操等の普及活動，また菜食主義に基づく自然食運動，人間本来の治癒能力を評価する自然療法運動，精神的な安息を求めるサイコセラピー的な活動，衣服改革や人間の身体を礼賛する裸体運動，さらには住居改革を基点とした都市改革運動や都市の景観の保存を求めた文化財保護運動等々。そしてそれらの中には，今日のエコロジー運動の先駆的な試みとも見なせるものもあったと言われている。

一般にE.ディーデリヒス（E.Diederichs）の名は，世紀転換期のドイツにおける有数の出版社，「E.ディーデリヒス出版（Eugen Diederichs-Verlag）」の社主として知られることが多いが，彼が自らの「出版メディア」を通じて当時の生活改革運動に深く関わっていたことは意外と知られていない。

本稿の目的は，生活改革運動におけるE.ディーデリヒスの足跡を，彼が特に深く関わりを持った教育・文化活動に焦点を当てて若干の論究を行うことである。以下まず最初に，その予備的考察として彼の出版活動の意味から考えてみよう。

2．ディーデリヒスと出版活動

「出版」活動は，書物を媒介とする商業活動であり，それは言うなれば一つの「ビジネス」に他ならないが，ディーデリヒスは，「出版活動」に対して単なるビジネス以上の意味と意義を付加していたと言われている。モッセの指摘にもあるように，彼の出版活動は，彼独自な思想の反映であり，自己の思想の原型とその発展形態の模索であった。出版活動を通して，市場開拓を行い，新たな思潮，先駆的な試みを知り，自己の思索活動を深め，さらにそれを出版メディアを介して発信したわけである(2)。

ディーデリヒスは，1904年ライプツィヒからテューリンゲンのイエナ（Jena）に本拠地を移し，本格的な出版活動を開始する。この時期，ライプツィヒでは，主に文芸・芸術関係の書物を扱うインゼル社(Insel-Verlag)が，ベルリンでは，自然主義的傾向の出版物で名声を博していたS.フィッシャー社（S.Fischer-Verlag）が，すでに商業的な成功をおさめていた(3)。ディーデリヒスは，自らの活動の本拠地をイエナに置いたことを，いささか象徴的な表現を使って次の様に述べている。「イエナは，世界の中心である。何故なら大陸の中心がヨーロッパであり，ヨーロッパの中心がドイツであり，そして東西の中心に，さらに南北の中心にイエナがあるからだ」(4)。彼が指摘するように，イエナは，地理的に見ると北のベルリンと南のミュンヘンのほぼ中間に位置し，パリ，ドレスデン，プラハを結ぶ主要幹線上に位置していた。しかし，彼は単に地理的な意味においてだけではなく，文化的な意味においてもイエナを「世界の中心」と見なしていた。それは，文化の町ワイマールがすぐ隣であったことと無縁ではない。「・・・イエナの精神的伝統も私を引きつける。ここは，ロマン主義が開花した場所であり，シラー，ゲーテ，ヘルダーリンそして，フィヒテが生活した場所でもある。しかもワイマールが近くに位置し，過去が自然と建物を通して現代にまで継承されているが故に彼らの精神的遺産を選び出すことは容易である。私はいつも，シラーの歌にイエナの風景が挿入されている喜びを感じていた」(5)。

イエナに対するディーデリヒスのこのような想いが，その後の彼の出版活動を方向付けることになる。それは，ネオ・ロマン主義文学への傾倒である。

「私は，4月1日イエナに引っ越しましたが，私は主なロマン主義者たちの著作を出版したいのです。より明確に言えば，フィリードリヒ・シュレーゲル，ヘルダーリン，フィヒテ，シェリングそしてヘーゲルです。何か100年記念祭のようなものを文書に残し，特に〈イエナ〉という名前を繰り返し全面に押し出すことが，私が好むアイディアなのです」(6)と彼が述べているように，ネオ・ロマン主義的傾向性は，彼の思想や行

動を基礎づけるキーワードと言ってよいであろう。それは，生活改革運動との接触の際にも極めて重要な役割を果たしている。

ところが他方で，このロマン主義文化の香り高い古き大学都市イエナは，当時近代都市への変貌期を迎えていたのである。機械技師であったカール・ツァイスとリベラルな大学教授エルンスト・アッベの二人によって創設された「ツァイス社」は，イエナのみならず，世界的にも注目される光学機器メーカーであった。このツァイス社の操業が，優れた若い労働力をイエナに引き寄せることになり，イエナの人口は，1905年から1914年までに，2万6686人から倍増の4万8659人になっている[7]。1906年に建設された近代的なツァイス製作所は，鉄筋コンクリート性で，それに隣接する形で民主主義的な教育文化施設「フォルクスハウス（Volkshaus)」が建設された。さらに「カール・ツァイス財団」の強力な財政的な援助により，イエナ大学は，施設面でも，人的な面でも近代化を図ることが可能となった。一元論者で，生物学者のエルンスト・ヘッケル（E.Haeckel）や，教育学者のヴィルヘルム・ライン（W.Rein）や，哲学者のルドルフ・オイケン（R.Eucken）のような著名な学者が相次いで講演を行っている[8]。さらに，大学に対する財団の継続的な援助活動は，1908年のイエナ大学新校舎建設で頂点を迎えることになるが，この建設をめぐる諸問題にディーデリヒスは深く関わることなった[9]。

事の発端はイエナ大学新校舎の建設場所であった。計画では，ゲーテのかつての宿泊所であった「旧イエナ宮殿」を取り壊し，新校舎を立てることになっていたのである。ディーデリヒスは，すでにライプチィヒ時代に，彼の出版社の著者であったフェルディナンド・アヴェナリウス（F.Avenaius)，ヴィルヘルム・ベルシェ（W.Boelsche）や，芸術家村で名高いヴォルプスヴェーデ（Worpswede）の芸術家たち，さらにはアルフレッド・リヒトヴァルク（A.Lichtwark）のような博物館関係者らと共に「郷土保存同盟（Bund Für Heimatschutz)」を創設し，文化財の保護や都市景観の保存に深い関心を寄せていた[10]。そのため彼は，この新校舎建設計画に即座に反対を表明し，その反対運動を世に知らしめるため，シラー没後百年を記念した展示会を旧イエナ宮殿において開催する準備を進める。

1905年6月4日旧イエナ宮殿において「シラー記念美術文化展示会」が開催された。この展示会は，シラーの著作物や書簡の展示はもとより，シラーの世界観に関する講演，さらにはシラーの時代の家具や，部屋の装飾品など当時の風俗・文化の展示がなされ，著名なドイツ工芸の職人たちが集う場となった[11]。反対運動は，結果的には成功しなかったが，この展示会を通じて，ディーデリヒスは，後の「ドイツ工作連盟（Werkbund)」の創設につながる人々との接触を持つことになった。

かくしてディーデリヒスの活動は，単に出版活動に留まらない広範囲な社会活動へとさらに拡大していく。生活改革運動への本格的な参画が始まるのもこの時期である。以下考察を続けてみたい。

3．工芸文化・芸術改革運動との接触

1905年のシラー記念展示会では，ドイツ各地の工芸職人の工房との交流拡大と，関係強化がはかられたが，これは，彼がドイツの伝統的工芸文化に注目するきっかけとなった。ディーデリヒスは，すでに1900年頃から英国の伝統的な工芸文化に関心を寄せており，ジョン・ラスキン（J.Ruskin）の著作を数多く出版していた(12)。ラスキンは，19世紀後半以降急速に拡大してきた機械産業の非人間性を指摘し，手作りの生活用品や調度品が，人工的，機械的に作られたものへと変えられていく社会風潮を批判して，古き工芸文化の復興とその重要性を主張した。その主張は，ラスキン同様伝統工芸文化を重視したウィリアム・モリス（W.Morris）に受け継がれ「アーツ・アンド・クラフツ（Arts & Crafts）」運動へ結実したことはよく知られている(13)。

ラスキンやモリスの工芸文化論をドイツに紹介したのは，プロイセン商務省付の建築家ヘルマン・ムテジウス（H.Muthesius）であった(14)。彼は，美術・工芸・建築を中心とした長期にわたる英国視察の後，1904年ディーデリヒス社から『文化と芸術』という著作を出版したが，この出版を契機にディーデリヒスとは緊密な関係を持つに至る。1907年，後のドイツの新工芸運動をリードする「ドイツ工作連盟」が創設されるが，この連盟の発起人は，ムテージウスであり，ディーデリヒスであった。ドイツ工作連盟の理念は，手仕事の人間形成的意義の重視と，「良質の工業製品」を生み出す創造的工芸活動に求められ，この理念が，より徹底された教育プランとしてバウハウス（Bauhaus）に受け継がれた。バウハウスの芸術教育活動は，自由な芸術と応用芸術との止揚を目指していたが，その核になる理念は「ドイツ工作連盟」のものに他ならない。ドイツ工作連盟の設立集会では，ドレスデン工業大学教授で，その後ケルン副市長として同市の都市計画を実現させたフリッツ・シューマッハー（F.Schumacher）が記念講演を行った。彼もディーデリヒスとは親しい関係にあり，先のシラー記念展示会で講演を行い，ディーデリヒス社から多くの著作を出していた(15)。

ところで，ドイツ工作連盟との関わりによって，ディーデリヒスの活動領域はさらに拡大するに至る。それは，工作連盟の初代の書記長ヴォルフ・ドールン（W.Dohrn）を通して，ドレスデン近郊の田園都市ヘレラウ（Gartenstadt Hellerau）との緊密な関係が成立したことである(16)。と言うのもドールンは，田園都市ヘレラウの創設時の

有力なメンバーであったからだ。「田園都市」という理念が，英国の都市計画家 E.ハワード (Ebenezer Howard) によってもたらされたことはすでによく知れられているが，ヘレラウは，この理念をまさしくドイツにおいて具体化したものであった。喧噪に満ちた都市における非人間的な生活の刷新を図るべく，新しい人間文化復興に取り組む知的エリート（知識人や芸術家たち）を大都市近郊に集結させる。これが生活共同体都市ヘレラウの目的であったと言われている[17]。

当時のヘレラウには，様々な領域から人材が集まっていたが，ディーデリヒスが特に注目したのは，新しい身体文化の創造を目指すダンス教育運動であった。1909年ジュネーブで活動していたエミール・ジャック・ダルクローズ (Emile Jacques Dalcroze) は，ヘレラウに新しいダンス教育運動の施設を創設するが，彼の「リズム体操」は，ダンスを通して空間，運動，光線の三つの要素の統合を図り，新しい共同体精神を獲得することを目指していたと言われている[18]。

ディーデリヒスは，ダルクローズのダンス教育実践を見学するためヘレラウを実際に訪問している。「私が，この運動の年次報告する必要を感じ，数多くの祝祭劇や練習時間を見るために新しくできた田園都市を訪れたのは言うまでもない」[19]。ダルクローズが編集した年報『リズム (Der Rhythmus)』は，1911年にディーデリヒス社から刊行され，翌年の1912年には第 2 巻が出された[20]。ディーデリヒスは，都市化，産業化によって急速に浸食され始めた人間文化再生の可能性を模索していたが，ダルクローズのダンス教育実践は，彼の考えにまさに相応しいものであったのである。ディーデリヒスは，1911年の出版カタログで，ダンス教育の重要性，特に「リズム」の身体と精神に対する意義を次のように述べる。「過去の遺物ではなく，現に生き生きしているものの統合を模索している我々の時代において，リズムは，目に見えない憧憬の表出である。何故ならば，リズムこそが形成された生 (Leben) を示すからだ。リズムは，身体的なものを精神化し，精神的なものを具現化する」[21]。

多大な期待をもって受け入れられたダルクローズのダンス教育運動の試みは，豊かな人的成果を生んだ。それは，彼のダンス理論を理解した指導者たちの輩出である。ロドルフ・ボーデ (R.Bode)，マリー・ウィグマン (M.Wigman)，グレーテ・ヴィーゼンタール (G.Wiesenthal) らは，その後のドイツにおけるダンス教育運動の発展にとって極めて重要な人物であるが，彼らはダルクローズの教育施設の最初の課程から参加していた[22]。さらに，モッセの指摘にもあるように，彼の理論はヴィッカースドルフの自由学校共同体 (Freie Schulgemeinde Wickersdorf) に採用され，好評を博したと言われている[23]。ディーデリヒスは，このダンス教育運動との関係において自由学校共同体と密接な関わりを持っていたが，彼とヴィッカースドルフとの関係は実

はそれ以前からすでに深く進行していた。ここでは，次にディーデリヒスと自由学校共同体の関係，さらには改革教育学運動（Reformpädagogische Bewegung）との関わりについて考察してみよう。

4．ディーデリヒスと改革教育学運動

ドイツにおいて20世紀初頭から1920年代にかけて隆盛をむかえたと言われる改革教育学運動は，旧態依然とした当時の硬直的な学校教育制度や，知識の探求よりも知識の習得に重点がおかれていた教育内容，規律と服従を強いる教師ー生徒間関係等々に対するプロテスト運動として知られている。そして，この運動が生起する直接的なきっかけとなったのは，「文化批判（Kulturkritik）」と呼ばれる19世紀後半以降の広範囲な文化思潮であった。

ディーデリヒスの学校教育に対する不満や批判は，まさしくこの一連の文化批判の影響を強く受けていると言ってよいであろう。特に彼が強く興味を引きつけられたのはニーチェ（F.W.Nietzsche），ユリウス・ラングベーン（J.Langbehn），さらにはパウル・デ・ラガルド（P.D.Lagarde）であった[24]。ニーチェは，ドイツ文化の独自性欠如や，ドイツ人の同時代に対する現実性喪失の原因を，教育と陶冶に求め，厳しく批判した。ディーデリヒスは，彼自身の教育体験に基づき，ニーチェの教育批判に強く共鳴している。

1890年にはユリウス・ラングベーンの『教育者としてのレンブラント』が出され，当時の文化批判書としてはベストセラーになっていたが，ディーデリヒスも発売早々に購入したと言われている[25]。ラングベーンはこの著作の中で，歴史上のレンブラントとは特に関係のない当時の社会文化批判を展開したのだが，その批判の中で彼が最も強調したのは，合理主義的精神を優先する学問と教養の結合の問題であった[26]。そして，学問に対する芸術の優位を主張し，精神生活を根底から変革させるため，芸術教養の必要性を指摘する。前節で見たようなディーデリヒスの芸術改革運動に深い関わりを持つ端緒になったのは，このラングベーンとの出会いが極めて大きかったと言われている[27]。

このような文化批判者たちの思想的影響は，彼の出版活動にもいち早くあらわれている。すでに1904年には，ディーデリヒス社としては初めて教育批判書として『ドイツの学校の文化的価値』が刊行された。著者は，元教師で，視学官の経験もあったアルトゥーア・ボヌス（A.Bonus）である[28]。ボヌスは，「鼻持ちならない物質主義」，「道徳的ではない資格制度」，「退屈で，陰鬱な就学の苦痛」を厳しく批判し，人文主義

的な教育を強く否定し，被教育者の創造力と，本能に基づいた自然や事物への興味関心を高める教育の重要性を指摘した言われている[29]。言うなれば彼の教育論は，ニーチェ風の文化批判とルソー主義が融合したものであったと言ってよいであろう。

ところで，ディーデリヒスの思想並びに諸活動に対するこのような文化批判者たちの影響力について言えば，ニーチェやラングベーン以上にパウル・デ・ラガルドの影響が無視できない。いやむしろ，教育に対するディーデリヒスの問題関心が，改革教育学運動へと向けられていったのは，ラガルドの教育論に由来すると言ってもよいであろう。ラガルドは，ラングベーン同様伝統的な人文主義的諸原則に固執し，古典語偏重のギムナジウム教育の現状を厳しく非難した。そうした教育は，生徒の自発性と感情を押さえつけるだけで何ら有益なものをもらさない。このような教育システムが，ドイツにおける優秀な才能の開花を妨げている。そして彼は，この閉塞的な教育システムを打破すべく，ある種のエリート教育理念に基づく新しいタイプの学校創設を主張する。「私が要求するのは，家柄とは関係なく，道徳的・知的能力を有する少数の選ばれた者のみに，真の教育を行うことにより国民に信頼され，国民のために政務を行う階級を形成することである」[30]。そのためには，堕落した都会生活からかけ離れた「田園地域」において未来の「指導者」を育成する学校が必要となる。もちろん，その様な学校においては，最も厳しい「知的道徳規準」が科せられることになる。ディーデリヒスは，このようなラガルドの教育理念の具体化を模索していくのだが，その過程において出合ったのが，ヘルマン・リーツ（H.Lietz）の教育実践であった。

リーツは，英国のパブリック・スクールの寄宿寮アボッツホルム（Abbotsholme）での経験に基づき，1898年ザクセンのイルゼンブルク（Ilsenburg）に下級学年用の教育寄宿舎を設立した。彼は，意識的に「田園，すなわち小さな村の近郊」に田園教育舎（Landerziehungsheim）を建て，知育偏重のカリキュラムではなく，自然や土地に慣れ親しみ，農民や手工業者たちの慎み深い生活に基づく生活学習的なカリキュラム編成を試みたと言われている[31]。リーツは，その後の1901年には中級学年の学校をテューリンゲンのハウビンダ（Haubinda）に，1904年には上級学年の学校をレーンのビーバーシュタインの古城（Schloß Bieberstein）に創設している。モッセの指摘にもあるように，リーツの田園教育舎は，国家が掌握する学校とは違って「私立」というその自由な校風が注目され，1920年代までには少なくとも40前後の類似施設を生んだと言われている[32]。

ディーデリヒスは，リーツの活動にいち早く注目し，1902年3月3日には，ある教育者に宛てた書簡の中で，1901年の段階でリーツに以下のような出版の打診をしたことを書きしるしている。「・・・私は，リーツ博士の田園教育舎にとても興味を持って

おり，すでに昨年彼には，私が彼の著作を出版したい旨を伝えております」[33]。さらに，1904年のボヌスへの書簡ではハウビンダ校について次のように述べている。「あなたは，一度は田園教育舎的なものと関わりを持つべきですし，一度はハウビンダに数日間滞在すべきです。そこには，自らの独自な考え方や想像力，直観等々にしたがって・・・成長している若者たちが本当にいるのです」[34]。これらの書簡に見られるように，ディーデリヒスは創設当初から田園教育舎に強い興味を関心を示したが，それはまさに彼が，田園教育舎の教育実践に，ラガルドの教育理念の具現化とその教育実践の具体的な姿を見たからであると言ってよい。

しかしながら，リーツの教育実践に対するディーデリヒスの興味関心は長くは続かなかった。それはリーツの実践における強いナショナリズム的傾向性に，彼が嫌悪感を抱いたからである。モッセによれば，田園を愛し，農業や田舎への強い関心を示すリーツの「自然主義教育」には，ある種の両義的側面があったと言われている[35]。彼が，素朴な農民や手工業者の生活を高く評価するのは，確かに一面では自然回帰運動を代表したものであるように見えるが，他方でそれは，ゲルマン精神の再評価であり，ドイツ精神の再確認であった。その結果，彼が理想とする自然主義教育を追求すればするほど，ゲルマン的イデオロギーが前面に現れてくることなった。彼は，次第に異質な人種であるユダヤ人を排除し始める。このような傾向性に対するディーデリヒスの強い嫌悪感は，リーツがユダヤ人の入学制限を打ち出すに至って頂点に達することになった[36]。そのため，リーツの学園の中核的な指導者であったグスタフ・ヴィネケン（G.Wyneken）とパウル・ゲヘープ（P.Geheeb）らによる別個の田園教育舎創設の動きに対して[37]，ディーデリヒスは強い関心と賛同の姿勢を示し，出版者として全面的な援助を行った。1906年，自由学校共同体ヴィッカースドルフ校（Freie Schulgemeinde Wickersdorf）が創設される。ディーデリヒスは，創設当初からこの学校に対して様々な支援の手を差し伸べているが，それは，彼と同校の指導者ヴィネケンとの強い精神的なつながりによるところが大きい。ディーデリヒスは，これ以後ヴィネケンのヴィッカースドルフ校を基点として，改革教育学運動並びに青年運動と深く関わっていくことになる。

ディーデリヒスが，ヴィッカースドルフ校の教育実践において高く評価したのは，独自な学校自治組織であり，その自律的かつ民主的な運営形態であった。当時の知識人に大きな影響力を持っていたディーデリヒス社の雑誌『タート（Tat）』においては，ヴィッカースドルフ校の自治組織が次のように紹介されている。「ヴィッカースドルフは，学校国家制度を十分に発達させており，その制度の中で，生徒たちは議会形式に則って運営の一部を保有する。同僚の教師たちの組織も，そこでは完全に民主的なも

のであった」[38]。また，ディーデリヒスも自社の出版カタログにおいて，ヴィッカースドルフの学校運営や授業形態の独自性を次のように述べている。「生徒たちは，例えば校則を自分たちで決め，男女共学も自分たちで実際に行っている。宗教の時間は，まさに歴史に則って行われ，生物学は，通常実科学校で行われているよりも多くの時間が割かれている」[39]。1908年には，ディーデリヒスと共にスイスの小説家カール・シュピッテラー(C.Spitteler)が，ヴィッカースドルフを訪問したことが話題になった。周知のごとく，シュピッテラーは，その後の1919年ノーベル文学賞を受賞するなどスイスを代表する文豪であるが，当時多くの著作をディーデリヒス社から出版していた[40]。シュピッテラーの訪問は，出版者としてのディーデリヒスによる商業的な演出要素が多少入っているとしても，ヴィッカースドルフ校を世に知らしめるためには極めて重要な契機になったことは言うまでもない。ニーチェ的なヒロイズムによって古い叙事詩形式に新しい哲学的精神を吹き込んだシュピッテラーの思想は，ヴィッカースドルフ校にも浸透したが，クップファーの指摘によると「取って付けたような不自然なシュピッテラー信仰により，しばらくの間グロテスクな形式が受け入れられ」，教師の間でも評価が分かれたと言われている[41]。

ディーデリヒス社とヴィッカースドルフ校の親密な関係により，この年ヴィッカースドルフ校の教育理念をまとめた年鑑（Jahrbuch）が，ヴィネケンとアウグスト・ハルム(A.Halm)の共同編集によって発刊されることになった[42]。1909年には，1906年から1908年に至るヴィッカースドルフ校の教育実践記録をまとめた『自由学校共同体ヴィッカースドルフ年報（Jahresbericht）第1号』が出版されたが，この年報は1912年までに4号を数えるに至り，年鑑は1914年までに3巻出されている[43]。

しかしながら，このような継続的に進められた出版活動とは裏腹に，ヴィッカースドルフ校内部では，ヴィネケンとゲヘープの方針の違いが顕著になっていたと言われている。すでにシュピッテラーの思想の導入をめぐっても，ゲーテにあくまでこだわったゲヘープと，ゲーテよりもシュピッテラーの思想を重視するヴィネケンとの対立は決定的であったと言われている[44]。そしてゲヘープが，ゲーテの著作『遍歴時代』における「教育国」を理想としてヴィネケンよりもさらに生徒の自由な内発的活動を重視する教育理念を主張するに至って，両者の不和はもはや修復できないものとなる[45]。

ゲヘープは，1909年にはヴィッカースドルフを去り，翌1910年4月14日には，マンハイム（Mannheim）にほど近いオーデンヴァルト山地にオーデンヴァルト(Odenwald）校を創設する。一方，ヴィネケンは，教育方針をめぐる生徒の保護者との対立から，ザクセン・マイニゲン公国当局の監査を受け，不適正な学校運営との評

価を下され，1910年4月までにヴィッカースドルフを解雇される通知を受けるに至った[46]。

ディーデリヒスは，両者の対立を何とか解消しようとして努力したが，結局実を結ぶことはなかった。彼は，1909年1月14日のヴィネケン宛ての書簡において次のように述べている。「私は，ゲヘープが立ち去ることで，ヴィッカースドルフに対する興味を失ったり，何らかの感情を害したりはしていないことをあなたにお伝えします。もちろん，私は，あなた方二人が互いに助け合って，ヴィッカースドルフを一緒に発展させて欲しいと希望していましたが」[47]。ディーデリヒスは，ゲヘープのオーデンヴァルト校が創設されて以降も，基本的にはヴィネケンとの関係を尊重したが，ゲヘープとのつながりも断ち切ることはなかった。特に『タート』の1913/14年第12巻の「教育特集号」では，彼の協力者オットー・エルドマン（O.Erdmann）の論文「オーデンヴァルト校の活動組織」や，ゲヘープ自身の論文「生活感覚としての男女共学」を掲載するなど，広くオーデンヴァルト校の教育実践を紹介している[48]。

ヴィッカースドルフを解雇されたヴィネケンは，著作の執筆や，活発な講演活動を行った。特に1913年にディーデリヒス社から出版された『学校と文化』は，1920年までに8517部にもなり，ヴィネケンの名は広く青年層に知られることになり，ヴィネケンがドイツ青年運動（Jugendbewegung）に深く関わるきっかけになった[49]。一方，この時期ディーデリヒスの方も，別のルートから青年運動との関わりを深めていたと言われている。ディーデリヒスとヴィネケンは，第1次大戦前の青年運動の頂点とされる「自由ドイツ青年大会（Freideutscher Jugendtag）」（1913年開催）に共に参加しているが，それ以前から青年運動の原型とも言えるヴァンダーフォーゲル運動とも関わりを持っていた。ここでは，ヴァンダーフォーゲル運動に考察の視点を限定して若干の分析を行いたい。

5．ディーデリヒスとヴァンダーフォーゲル運動との関わり

周知のごとくドイツ青年運動は，世紀の変わり目頃から1930年代にかけて，主に青年層を中心に行われた生活改革運動であるが，その運動の起源は，ギムナジウムの生徒たちを中心に，ヴァンデルン（Wandern 徒歩旅行）を行うことを主要な目的とした「ヴァンダーフォーゲル（Wandervogel）運動」にあったと言われている。ディーデリヒスが，ヴァンダーフォーゲル運動との直接的な接触を持つことになったのは比較的遅く，1910年頃であった。しかしながら，文化的なヴァンダーフォーゲル活動の原型とも言えるサークル「シュテークリッツ・ヴァンダーフォーゲル登記結社（Steglitzer

Wandervogel E.V.)」(1904年創設)の議長代理で作家のハインリッヒ・ゾーンライ(H. Sohnrey)は，当時ディーデリヒスの親しい友人の一人であったと言われ[50]，その意味では彼は創設当初のヴァンダーフォーゲルとかなり近い位置にいたことが分かる。

「ヴァンダーフォーゲル。生徒旅行委員会（Wandervogel.Ausschuß Für Schülerfahrten)」を指導したのは，シュテークリッツ・ギムナジウムの最上級生カール・フィッシャー(K.Fischer)であった。彼は，この組織に中世遍歴学生ヴァガント(Vagant)の位階制を採用し，厳格な上下関係に基づく階級的組織を作り上げた[51]。組織の中の指導者は，上級バッハント（Vachant）と呼ばれ，「絶対君主」なみの権限が与えられた。このグループの目的は，自然への回帰と若者らしい生活改革であったが，そのために禁酒・禁煙の節制が求められ，女子のメンバーの参加を認めず，「強行軍」とも言えるヴァンデルンを実施した。このような活動形式は，その後分裂した「古ヴァンダーフォーゲル(Alt-Wandervogel)」に受け継がれ，1910年までにはドイツ本国のみならず，ドイツ語圏であるスイス，オーストリア，ボヘミアにまで拡大する最大のヴァンダーフォーゲル集団になった[52]。

しかしながら，こうした厳格で権威的な組織形態，遍歴旅行優先で文化的な活動や女子との自然な交流を排除するフィッシャー流の組織活動に対しては当初から批判があった。1904年には分離独立したシュテークリッツ・ヴァンダーフォーゲル登記結社が創設される。そして，さらに1907年には，女子メンバーや民衆学校生徒の加入と，遍歴旅行に際した節制の強化を掲げたイエナの古ヴァンダーフォーゲルのメンバーらが，新組織を創設する（指導者はハンス・ブロイアー（H.Breuer))。それが，「ヴァンダーフォーゲル・ドイツ同盟（Wandervogel, Deutscher Bund)」(以下ドイツ同盟と記す）である[53]。

ディーデリヒスは，この同盟とディーデリヒス自身が創設した生活改革サークル「ゼラ・クライス」[54]の両方に所属していたユリウス・フランケンベルガー（J.Frankenberger)を介して，1910年に加入することになる[55]。その際，彼とドイツ同盟との共通の問題関心は，古きドイツ文化の発掘であり，特に「民衆歌謡（Volkslied)」の復興にあったと言われている。「私は，意識的にヴァンダーフォーゲルとの共同活動を行った。それは，かつての古い民謡歌謡を再び甦らせることであった」[56]。すでに，ヴァンダーフォーゲル内においては，ブロイアーが古き民衆歌謡を収録，編纂した『ギターのハンス(Zupfgeigenhansl)』が青年層に好評を博していた[57]が，ディーデリヒスは，1913年に『ドイツ青年のための民衆歌謡本』を刊行した。この歌謡本は，初年度で9892部にのぼり，その後も持続的に売れ続け，1930年までには4万7288万部に達し，ディーデリヒス社に大きな利益をもたらしたと言われている[58]。

民衆歌謡本の成功は，ディーデリヒスとヴァンダーフォーゲルの青年層との関係をより深めるためには重要な役割を果たしたと言えるであろう。青年層の読者たちを掌握しておくことは，彼の出版活動の将来的な展望のためにも不可欠なことであったはずだ。「文化的堕落を招いた今の成人世代による生活改革が期待できない以上，将来を託すのは青年世代しかない。その意味で生活改革運動の真の中心は彼ら世代以外にはあり得ない」。このような青年礼賛は，当時の教養市民層に共通していたものであり，ディーデリヒスの認識もその典型であると言える(59)。彼はクルティウス(E.Curtius)に宛てた書簡の中で，次のように述べている。「私は，青少年たちが持っていた新しい心情や生活感，世界を理解の対象としか考えない大人世代よりも己に誠実な態度，さらには強い体験力に気づいていました。それが創造的であるのなら，私はどんなに一面的であってもそれを愛します。背後にいる青少年たちに私が気づいていないとしたら自分の出版社によって何かをやり遂げることはできないでありましょう。このことだけはあなたにお伝えできます」(60)。さらに別の書簡では，青年期の重要性を次のように語っている。「青年時代は，放浪しなければなりません。都合のいい理屈で伝統的な見解に凝り固まったり，あまりにも若いうちから仕事や女に深入りしてしまうのは無意味なことです。無限の広がりに向かって，しかも故郷の狭い境界を乗り越える永遠の憧憬。目を見開き，体験しなさい。世界の有り余るほどの宝を飲み干すために」(61)。

青年世代に対するこのような強い期待を持ち，ヴァンダーフォーゲル関係者たちとかなり近い交友位置を維持しながらも，ディーデリヒスと彼らとの直接的な接触を遅らせたのは，当時のヴァンダーフォーゲルが有していた「過度なロマン主義」であった。彼は，ヴァンダーフォーゲルの文化活動のある種の「稚拙さや未熟さ」と「陶酔したロマン主義 (Der schwärmerische Romantizismus)」には反発を感じていたと言われている。ディーデリヒスは，彼らの運動は，基本的には「逃避」活動であり，そのような行動からは「創造的な」文化活動は生み出されないと考え，その運動のあまりの「センチメンタリズム」的な傾向性を批判していた(62)。ただ，ヴァンダーフォーゲル運動が持つある種の「解放性」や，精神的な覚醒をもたらす「生活改革的」な運動形態は，彼自身が先導的な役割を果たし，その後のドイツ青年運動の中核的な存在になった「ゼラ・クライス」にも受け継がれ，その活動に大きな影響を与えている(63)。1908年から毎年行われた「夏至祭 (Sonnenwendfeier)」や，中世の遍歴学生のスタイルで短期旅行をする「放浪遍歴の旅 (Vagantenfahrt)」や，男女混合の「ヴァンデルン (Wandern)」等は，ヴァンダーフォーゲル運動におけるいわば「必須アイテム」であったと言ってよいであろう。

6．おわりに

以上のようなディーデリヒスの活動の足跡を見ていくと，思想・文化活動の組織者(プロモーター)としての出版者の役割は極めて重要であったことが分かる。特にこの時期のドイツは，まさに「出版革命」とも言えるほど大規模な出版活動が行われた時期であり，出版社の文化的，社会的なその影響力の大きさには驚かされる。

例えば，E.ディーデリヒス社と並んで当時のドイツを代表する出版社 S.フィッシャー社（S.Fischer-Verlag）は，今世紀前半のドイツにおけるノーベル賞文学賞受賞者ーゲールハルト・ハウプトマン，トーマス・マン，ヘルマン・ヘッセらーを独占していたと言われている(64)。もちろんノーベル文学賞が文学的価値の絶対的基準ではないにしてもその社会的認知機能は無視できない。さらに，S.フィッシャー社は，文学雑誌『自由舞台 (Freie Bühne)』を編集しており，この雑誌には自然主義文学の若手の作家が先を争って作品を投稿したと言われている。このような出版活動を見ていくと，この時期のドイツの文学や，さらにはドイツ文化と社会に与えた S.フィッシャー社の役割も極めて大きかったと言うことができよう。

ディーデリヒスと，S.フィッシャー社の社主 S.フィッシャーの出版活動を比較していくと，両者の相違に気づくことできる。上山氏の指摘によれば，ディーデリヒスもフィッシャーも著者に対して「教育的な影響」を及ぼす点では共通しているが，ディーデリヒス場合，著者（主に生活改革運動の指導者たち）との間にできる限り親密な関係を結ぼうとしたと言われている。ディーデリヒスは，彼らとの関係を「精神的婚姻」と呼び，彼の育て上げた著作者たちを「出版による息子」とまで呼んだと言う(65)。さらに，ディーデリヒスは，出版活動に際して読み手側の「教育者」ー特に，生活改革運動の「指導者」ーとしての役割を重視し，著者や活動家たちの前に立ってそれぞれの個人的世界を世論に反映しようとしていたと上山氏は分析している。すなわち，ディーデリヒスは，言うなれば著者や活動家らを先導して，思想・文化活動をコントロールした出版者であったと言うこともできるのではあるまいか。そして，そのような出版活動は，すでに冒頭で指摘したように彼独自の思想の反映であり，自己の思想の発達形態の模索であったのである。

E.ディーデリヒスの思想と行動は，そのセンセーショナルな立ち振る舞いや，神秘主義的精神性への愛着，さらには彼の出版社の派手な催し物等々から，従来等閑視される傾向が強かったと言われている。しかし，モッセが強調するように，『タート』誌上の数々の彼の論文や，彼の著作，書簡等を見ていくと彼には明確な思想体系が存在し

ており，この時期の「ネオ・ロマン主義」的思想傾向の代表的なものであると言える[66]。モッセは，すでにディーデリヒスのネオ・ロマン主義に見られる「フェルキッシュ(völ-kisch)」な側面が，後のナチズムにつらなるドイツ・イデオロギーと密接な関係を持っていることを詳細に分析している[67]。彼のネオ・ロマン主義思想の特質，さらにはそのような思想が，彼の活動をどのように動機づけたのか等々は，極めて重要な問題ではあるが，本稿の考察領域をはるかに越えたものである。今後の課題としてみたい。

註

(1) 山名淳論「教育と自然療法―19/20世紀転換期ドイツ田園教育舎の生活様式をめぐって―」(『外国学研究第41号』神戸市外国語大学外国語学研究所，1998年所収) 28～30頁。

(2) Mosse,G.L.: Die völkische Revoltion, Frankfurt am Main, 1991, S.62. 英語版からの邦訳書としては，ジョージ・L・モッセ著/植村他共訳『フェルキッシュ革命―ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ』柏書房，1998年，がある。

(3) Werner, M.G.: Bürger im Mittelpunkt der Welt. In: Der Versammlungsort moderner Geister, München, 1996, S.28.

(4) Diederichs,E.：Lebensaufbau, 1920/21, S.245 (zit.nach Werner, M.G., S.25).

(5) Ibid, S.276 (zit.nach Werner,M.G., S. 28).

(6) Eugen Diederichs an Martin Rade, 26. Oktober 1903. In：Eugen Diederichs Leben und Werk, Jena, 1936, S.88.

(7)～(8) Werner, M.G., S.29.

(9) Ibid, S.33.

(10) Ibid, S.30. 郷土保存同盟の綱領は，以下の6つであった。1．記念碑の保存，2．伝統的な地方景観やブルジョア的建築様式の保存，3．廃墟を含んだ風景の保存，4．地方独自の動植物の生活圏の救済，5．民族芸術と慣習・しきたりの保持，6．祝祭や服装文化の継承。

(11) Ibid, S. 34～35.

(12) Ulbricht,J.H.：Mäzen für Kulturreform. In：In：Der Versammlungsort moderner Geister, München, 1996, S.86.

(13) リヒトヴァルク著/岡本定男著訳『芸術教育と学校―ドイツ芸術教育運動の源流』明治図書，1985年，24頁。

(14) 同上書，38頁。

(15) Ulbricht,J.H.,a.a.O.,S.87.

(16) Viehöfer,E.：Der Verleger als Organisator, Frankfurt am Main, 1988, S.28.

(17) Ulbricht,J.H.,a.a.O.,S.87. 同様の生活共同体思想は，すでにベルリン近郊のフリードリヒスハーゲンに集まった文学者や詩人たちのクライス「フリードリヒスハーゲン・クライス」等にも見られると言われている（上山安敏『神話と科学―ヨーロッパ知識社会　世紀末～20世紀―』岩波書店，1984年)。

(18) ジョージ・L・モッセ著/佐藤他共訳『大衆の国民化―ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』柏書房，1994年，161～164頁。ダルクローゼのダンス教育の特質については，次の文献が取り上げている。

真壁宏幹論「美的人間形成の〈脱一歴史化〉—1910～1920年代ドイツの芸術活動と芸術実践の考察を通して—」(近代教育思想史学会，1998年9月27日発表レジュメ)。

(19) Diederichs,E.：Der deutsche Buchhandel der Gegenwart in Selbstdarstellungen, Leipzig, 1927, S. 37.

(20) Viehöfer,E.,a.a.O.,S. 125.

(21) Neuerscheinungen, Politik, Antike und Renaissance. Bücher-Verzeichnis. Jena, 1911, S.8 (zit.nach Viehöfer, S. 28).

(22) Viehöfer,E.,a.a.O.,S. 29.

(23) Boehm,M.v.：Der Tanz, Berlin, 1925, S.128.

(24) Viehöfer,E.,a.a.O.,S. 40.

(25) Ibid, S. 41.

(26) Stern.F.：The Politics of Cultural Despair. A Study in the Rise of the Germanic Ideology, Berkeley and Los Angeles, 1961, pp.117～118.

(27) Viehöfer,E.,a.a.O.,S. 41.

(28) Bonus,A.：Vom Kulturwert der deutschen Schule, 1904. 本書は，第一次大戦前までに，3339部も売れている (Viehöfer,E.,a.a.O.,S. 125)。

(29) Ibid, S. 40.

(30) Stern.F,a.a.O.,S. 77.

(31) Mosse,G.L.：Die völkische Revoltion,a.a.O.,S.175.

(32) Ibid, S.174.

(33) Eugen Diederichs an einen Pädagogen, 3. Mai 1902. In：Eugen Diederichs Leben und Werk, Jena, 1936, S.64. この出版計画は，実際には実現しなかった。

(34) Eugen Diederichs an Arthur Bonus, 12. Juli 1904 (zit.nach Viehöfer, S.42).

(35) Mosse, G.L.: Die völkische Revoltion, a.a.O.,S. 176.

(36) Viehöfer,E.,a.a.O.,S. 42.

(37) この事件に関しては以下の論文が詳しい。山名淳論「ドイツ田園教育舎における教師統制の強化—ハウビンダ校における二度の教師離反を中心として—」(『日本の教育史学』教育史学会紀要第39集，1996年所収)。

(38) Landerziehungsheime in deutschen Sprachgebiet. In：Die Tat Ⅷ, 1916/17, 5, S.478.

(39) Vollständiges Verzeichnis der Werke des Verlages 1896-1912. Jena 1916, S.73 (zit.nach Viehöfer, S. 44).

(40) Viehöfer,E.,a.a.O.,S. 44.

(41) Kupffer,H.：Gustav Wyneken, Stuttgart, 1970, S.55.

(42) Wickersdorfer Jahrbuch 1908, Abhandlungen zum Programm der Freien Schulgemeinde. Hrsg.v.G. Wyneken und A.Halm, 1908. この年鑑に掲載されたヴィネケンの論文は，1913年に『学校と青年文化』として再編集され，出版された。

(43) Viehöfer, E.,a.a. O., S. 125.

(44) Kupffer, H.,a.a.O.,S. 55～56.

(45) Viehöfer,E.,a.a.O.,S. 45.及び天野正治編『現代に生きる教育思想　第5巻　ドイツ(2)』ぎょうせい，1982年，101頁。ゲヘープの教育実践に関しては次の文献が詳しい。

渡邊隆信論「オーデンヴァルト校におけるP.ゲヘープの教育実践—〈学校共同体〉を中心として—」

(『日本の教育史学』教育史学会紀要第39集，1995年所収)。

(46) Kupffer,H.,a.a.O.,S. 59～60.

(47) Eugen Diederichs an Gustav Wyneken, 14. Jan. 1909 (zit.nach Viehöfer, S.45).

(48) Erdmann.O.: Arbeitsorganisation der Odenwaldschule. In：Die Tat Ⅴ, 1913/14, 12. S.1284-1288.
Geheeb, P.: Koedukation als Lebensanschuung. In：Die Tat Ⅴ, 1913/14, 12.S.1238-1249.

(49) ヴィネケンの『学校と青年文化』は，1930年までに1万3256部に達した（Viehöfer, E.,a.a.O.,S.128.)。

(50) Ibid, S. 74.

(51) 上山安敏『世紀末ドイツの若者』三省堂，1986年，18～19頁。

(52) Kindt,W. (Hrsg.): Die Wandervogelzeit, Düsseldorf/Köln, 1968, S.104-112.

(53) Ibid, S.142-147.

(54) ゼラ・クライスの活動の内実については，拙論を参照のこと。
小川哲哉論「ゼラ・クライス（Sera-Kreis）に関する研究―20世紀初頭ドイツにおける知識人集団の一特質―」(『九州産業大学教養部紀要』第28巻第1号，1991年所収)。

(55) Viehöfer,E.,a.a.O.,S. 74.

(56) Eugen Diederichs an Friedrich von der Leyen, 29. März 1913.
In: Eugen Diederichs Leben und Werk, Jena, 1936, S.215.

(57) Kindt,W. (Hrsg.): Grundschriften der deutschen Jugendbewegung, Düsseldorf/Köln, 1963, S.560.

(58) Viehöfer, E.,a.a.O.,S. 128.

(59) Aufmuth, U.: Die deutsche Wandervogelbewegung unter soziologischem Aspekt, Göttingen, 1979, S.155.

(60) Eugen Diederichs an Erunst Curtius, 28. Dez. 1915. In: Eugen Diederichs Leben und Werk, Jena, 1936, S.269-270.

(61) Eugen Diederichs: Selbstbekenntnis. In: Ibid, S. 29.

(62) Viehöfer,E.,a.a.O.,S.77.

(63) ゼラ・クライスの特徴的な活動形態については，拙論参照。
小川哲哉論「ドイツにおける青年運動の展開―ゼラ・クライスの活動を中心に―」(小笠原道雄監修/林忠幸他編『近代教育思想の展開』福村出版，1999年刊行予定)。

(64) 山口知三他著『ナチス通りの出版社』人文書院，1989年，15～16頁。

(65) 上山安敏，1984年，前掲書，154～156頁。

(66) Mosse,G.L.：Die völkische Revoltion,a.a.O.,S.62-63.

(67) Ibid, S. 29. モッセは，3. Kapitel Die Neuromantik (S. 63-77) において，ディーデリヒスのネオ・ロマン主義思想の構造と特質を論究している。